

聖書：コリント人への手紙第一 16：1～4

説教題：聖徒たちのための献金

日時：2023年3月5日（朝拝）

コリント人への手紙第一もいよいよ最終章となりました。1節は「さて、聖徒たちのための献金については」と始まります。この「～については」という表現は、これまでも繰り返しこの手紙に出て来ました。いずれもコリント教会からパウロのもとに届いた手紙の中に、そのことに関する問いがあったことを示唆するものでした。7章1節や8章1節、12章1節などにその表現が出て来ました。ですからおそらくこの聖徒たちのための献金についてもコリント教会からの質問状にあったことだと考えられます。一体これはどういうものだったのでしょうか。これはエルサレムの貧しい聖徒たちを援助するための献金だったと考えられます。ローマ人への手紙 15章 25～26節：「しかし今は、聖徒たちに奉仕するために、私はエルサレムに行きます。それは、マケドニアとアカイアの人々が、エルサレムの聖徒たちの中の貧しい人たちのために、喜んで援助をすることにしたからです。」確かに今日の3節にも、この献金がやがてエルサレムに運ばれることが記されています。ですからここで扱われているのはいわゆる十分の一献金ではありません。これは援助献金であり、困窮した状態にある聖徒たちを支えるための献金です。

なぜエルサレムの教会は貧しかったのでしょうか。いくつかの理由が考えられます。まずあげられるのは彼らが迫害の中にあつたことです。使徒の働き 8章を見ると、ステパノの殉教をきっかけとしてエルサレムの教会に対する激しい迫害が起こり、多くの信者たちは諸地方に散らされたと記されています。そんな中、エルサレムにとどまった聖徒たちもいたのでしょうか。その彼らは当然厳しい環境の中に置かれました。周りのユダヤ人からはじき出されるような扱いを受け、それだけで困窮していたと考えられます。それに加えて使徒の働き 11章には大飢饉が生じたことが記されています。そのため、アンティオキアの教会はユダヤに住む兄弟たちに救援のものを送ったこと、それをバルナバとサウロすなわちパウロに託して送ったことが使徒の働き 11章 28～30節に記されています。またある人々は使徒の働き 4章の終わりに記されている財産共有の生活が困窮の原因となったのだらうと言います。ペンテコステ後のエルサレム教会について、使徒の働き 4章 32節に「信じた大勢の人々は心と思いを一つにして、だれ一人自分が所有しているものを自分のものと言わず、すべてを共有していた」と

あります。ある意味でこれは理想的な教会の姿であるように読めますが、——そして確かにその特定の期間、それはエルサレム教会の麗しい姿を示す特徴であったことは間違いありませんが、——長期的には財産を共有して消費する生活が後の日の困窮をもたらした遠因となったと多くの人が述べています。

そんな厳しい状況にあるエルサレムの聖徒たちを支えるために、パウロはガラテヤの諸教会と同様、コリント教会にも援助献金を命じたわけです。パウロは今、第3次伝道旅行でガラテヤ地方を通過した後、エペソにきています。彼はその後、マケドニア地方を通過してコリントへ行きます。この第3次伝道旅行は先の伝道旅行で打ち建てられた諸教会を訪問し、フォローアップすることと合わせて、エルサレム教会への援助献金を募るというプロジェクトがその大きな眼目としてありました。パウロはそこにどんな意味を見出していたのでしょうか。もちろん貧しい人々を顧みるということ自体に大きな意味がありますが、それだけではなかったようです。彼は自らが打ち立てた異邦人世界の教会を回って献金を求め、これがユダヤの教会と異邦人の教会を結ぶ絆となることを願いました。異邦人世界への福音宣教が進むにつれてユダヤ人の教会と異邦人の教会にはある種の軋轢が生じていたことが使徒の働きを読むと分かります。パウロはキリスト教会がこの二つに分断することがないように、ユダヤ人の教会も異邦人の教会も主にある一つのからだなる教会であることを目に見える形で示すために、異邦人の諸教会を回ってエルサレムの聖徒たちのための献金を募ったのです。その際、異邦人教会はその存在をユダヤの教会に負っているのだから、彼らを支える義務があるとも教えました。ローマ人への手紙 15 章 27 節：「異邦人は彼らの霊的なものにあずかったのですから、物質的なもので彼らに奉仕すべきです。」 こうしてユダヤ人の教会と異邦人の教会の一致を証しし、この献金が両者の一体性を強めるボンドとなることを願ってパウロはこれを行ったのです。

さてパウロは2節以降で、この献金プロジェクトに参加する具体的な方法について述べます。2節には大きく4つのことが言われます。一つ目は「いつも週の初めの日に」これを行うということです。パウロは「日曜日に」とは言わず、「週の初めの日に」と言います。これは何よりもこの日が主が復活された日であることを思い起こさせる表現です。そしてこれはこの日に当時の教会が集まって礼拝していたことを示唆するものです。パウロはその週の初めの日ごとに、これを行いなさいと言います。つまり定期的にとということです。毎週少しずつ、計画的に、この献金を実行しなさいと。

二つ目は「あなたがたはそれぞれ」と言われていることです。一人一人が参加します。特別なお金持ちだけがするものではありません。取り組むのはみんなです。おのおの、めいめいが実践します。

三つ目は「手元に蓄えておく」。ここで議論になるのは、その場所はどこなのか。各家庭なのか、それとも教会なのか。原文を見ると「各々が彼のそばに置く」と表現されていますので、自然なのは「それぞれの自宅に」となるでしょうか。しかしこれに疑問を呈する人もいます。「週の初めの日に」と指定され、その礼拝の日に皆が集まるのに、そこに持って行かないということがあるだろうか。援助献金だけ自分の家で保管することに何の意味があるだろうか。またパウロはここで「私がそちらに行ってから献金を集めることがないように」と言っているのに、もしそれぞれの家に保管されていたら、パウロが集めるのに余計時間がかかることにならないだろうか。学者によって意見は分かれています。なお、この「私がそちらに行ってから献金を集めることがないように」とは、手間が省けるようにということもあったかもしれませんが、パウロが到着してから慌てて献金に応じることにならないように、急かされる形で、衝動的に献金することにならないように、計画的に、良く準備してこのプロジェクトに加わるようにという意味が込められていたと考えられます。

そして四つ目は「収入に応じて」。原文で使われている言葉の意味「成功する」とか「栄える」というものです。そしてこれはギリシャ語の中態と取るべきか受動態と取るべきか、両者の可能性があります。受動態として理解するのが自然であると思われる。とするとその人は誰によって成功させられたのか、誰によって栄えさせていただいたのか。それは神によって！となるでしょう。つまり神が栄えさせてくださった。神が祝福してくださったということです。ただ「収入に応じて」とここを読むと、単に経済的なことだけが考えられているように受け取れますが、言われていることは神に感謝し、神が与えてくださった分に応じてささげるとのことだと思われま。その結果、一人一人の額は違って良いのです。多く与えられた人は多く、少なく与えられた人は少なくても良い。しかし単に収入額に応じてというのではなく、神への感謝を土台としてなすのです。生活に必要なものを与えてくださり、さらに多くを与えてくださっているのは神です。その神の恵みを感謝して、いただいたものに応じて、一人一人が自分で決めてささげる。喜びと感謝にあふれてささげるとのことです。

3 節は「そちらに着いたら」、つまりパウロがコリントに到着した時のことです。ここではパウロが献金を受け取ってエルサレムに持って行くのではないということが言われています。そんなことをしたら何かと問題が起こりそうです。あらぬ批判を浴びる結果となりかねません。そこでパウロはコリント人たちが承認した人たちが、コリント人たちの贈り物をエルサレムに届けると言っています。その際、パウロが手紙を書きます。推薦状のようなものでしょうか。パウロはエルサレム教会とコリント教会をつなぐことのできる人です。こうしてパウロは自分が直接この献金に触れることがないように注意しています。

しかし4 節で「もし私も行くほうがよければ、その人たちは私と一緒に行くことになるでしょう」と言います。もしコリント人が、その方が良いと判断するならば。面白いのは「パウロと一緒に行く」のではなく、コリントの代表者たちがパウロと一緒に行くと言われていることです。パウロが主となっています。パウロはすでにエペソ滞在時に異邦人の諸教会を訪問した後、エルサレムに行くことを決めていました（使徒の働き 19 章 21 節）。そしてその後、コリントで執筆したローマ人への手紙 15 章 25 節で、彼はローマ教会を訪ねて、そこからさらにイスパニアにまで行きたい旨を伝えますが、今は聖徒たちのための献金を届けるためにエルサレムに行くと言っています。ですからコリント人がどのような判断をしようともパウロはエルサレムに行くのです。そして使徒の働き 20 章 4 節にはエルサレムへと向かう帰路において、パウロに同行していた異邦人諸教会からの代表者たちの名簿が記されています。少し気になるのは、その使節団の名簿の中にコリント人が見当たらないことです。これはコリント教会の代表者はパウロと一緒に行かなかったということなのでしょう。彼らは独自に届けたのでしょうか。ここにコリント教会とパウロの間にあった関係の難しさを見る人たちもいますが、詳しくは分かりません。しかし大事なことはパウロはコリント人の判断に委ねていることです。そして彼らの方が良いと言うなら、その代表者は私と一緒に行くと言っていることです。

以上の箇所から私たちは何を学ぶことができるのでしょうか。ある人は、これまでこの手紙では高尚な教理や神学が述べられて来たのに、ここでいきなり現実世界の話となり、これまで抱いて来た興味を失うかもしれません。しかし思うべきは今日の箇所はこれまでの手紙の内容と丸っきり別の話ではないということです。これまでこの手

紙では、特に愛に生きるべきこと、他者を配慮すべきこと、互いに仕え合うべきこと、一致して歩むべきことが勧められて来ました。まさにそれと同じことに関する実践がここに語られているのではないのでしょうか。かえって教理はこのような実践と結び付いて表されなければならないことをこの箇所は私たち教えてくれるのではないのでしょうか。前の 15 章でキリスト教の特徴はからだの復活であるということが述べられました。キリスト教は単なる霊の強調、あるいは精神の強調をするにとどまらず、それが具体的なからだに現れることを大事にします。この光に照らして私たちの信仰はどうかと探られます。愛とか、一致とか、互いに仕え合うとか、支え合うと口では語りますが、実生活はどうか。自分のからだ、手足をそのように使っているか。与えられている賜物、特性をそのように用いているか。具体的な時間をそのために割いているか。そしてここで問われているのはお金の使い方です。私たちのポケットマネー、あるいは財布の中に関することです。私たちの信仰はそういう具体的な事柄に現されて行かなければならないということです。パウロは次の手紙、コリント人への手紙第二の 8～9 章で、この聖徒たちのための献金についてより詳しく語りますが、8 章 8 節でこう言います。「私は命令として言っているではありません。ただ、他の人々の熱心さを伝えることで、あなたがたの愛が本物であることを確かめようとしているのです。」つまりこの献金は愛のテストであり、また証拠であるということです。互いに愛し合う信仰に生きていることの見えるしるしであるということです。果たして私たちのお金に対する態度、あるいはその使い方はどのようなものでしょう。そこに私の信仰は現れているのでしょうか。信仰が本物なら、愛が本物なら、それは実際のお金の使い方にも現れる。この光の下で自分のあり方を点検し、神が召してくださっている本物の信仰の歩みへ進む者とされたいと思います。

そして大事なことは、ただ表面上そうすることではなく、神の恵みに導かれてそうすることでしょう。先に「収入に応じて」という部分には、神がその収入に現れる守りと繁栄を与えてくださっているというニュアンスがあると述べました。私たちは自分が手にしているものを自分が稼いだもの、自分の努力と力で得たものと思う時、そこから一銭も出したくない、他の人のために出すのはなるべく少なくしたいと思いやすいものです。しかしすべては神のものです。神が私に豊かに与えてくださっています。ある人は、とても自分はそうは思えない。自分は全く繁栄していない。今の生活から何かを他者のために出すことは到底できないと思うかもしれません。そういう時もちろんあると思います。あるいはさらに支援してもらって側に戻る方がふさわしい

という時だってあるでしょう。しかし今日の御言葉の前に静まってみる時、もしかすると私たちは、神が私を支え、豊かに与えてくださっている、榮えさせてくださっているという事実に改めて目が開かれるということがあるのではないのでしょうか。そして必要を覚えて苦しんでいる方々のことに思いが行き、自分にはいくらかでも与えることができるものが、神によって与えられているということに目が開かれるということがあるのではないのでしょうか。その神の恵みを感謝して、与えられているものに応じて進んでささげること。その喜びに生きるようにと今日の箇所は私たちを招いています。

「私が伝えたいことは、こうです。わずかだけ蒔く者はわずかだけ刈り入れ、豊かに蒔く者は豊かに刈り入れます。一人ひとり、いやいやながらでなく、強いられてでもなく、心で決めたとおりにしなさい。神は、喜んで与える人を愛してくださるのです。神はあなたがたに、あらゆる恵みをあふれるばかりに与えることがおできになります。あなたがたが、いつもすべてのことに満ち足りて、すべての良いわざにあふれるようになるためです。」（コリント人への手紙第二 9 章 6～8 節）